



近世的愛努史

近世のアイヌ史

Aynu's Early Modern

文・圖 | 谷本晃久 TANIMOTO Akihisa
(北海道大學大学院文學研究科教授・北海道大學
愛努先住民研究中心兼任教員)

譯者 | 陳由璋 (政治大學民族學系博士生)

文責・図 | 谷本晃久 TANIMOTO Akihisa
(北海道大学大学院文学研究科教授、北海道大学
アイヌ・先住民研究センター兼務教員)

訳者 | 陳由璋 (政治大学民族学学科博士後期課程)



2013年から始まった「イランカラッテ」キャンペーンのロゴマーク。アイヌ語とアイヌ文様を組み合わせたデザインを使用し、アイヌ語の「こんにちは」で北海道の特色を押し出している。(出典:「イランカラッテ」キャンペーン推進協議会 <http://www.irankarapte.com/>)

2013年迄今産官學合作舉辦的irankarapte活動標誌。設計概念結合了愛努語與愛努紋樣。以愛努語的您好打造北海道的當地特色。(圖片來源:「イランカラッテ」キャンペーン推進協議 <http://www.irankarapte.com/>)

日本史における「近世」という時代区分は、おおむね、豊臣秀吉の天下統一(1590年)から、徳川歴代将軍による支配を経て、明治維新(1868年)までの約300年間をいう。この時代は、豊臣秀吉もしくは徳川歴代将軍が全国の大名権力を一元的に支配・編成したことに特色を持つ。

それは、北海道(蝦夷島)の権力にも同様であった。室町・戦国時代に蝦夷島南部の渡島半島に覇を唱えた蠣崎氏は、和人領主を束ねる一方で、本州北部・秋田の大名である安東氏に臣従し、その権力を保障されていた。豊臣秀

日本史上所謂「近世」這段時代區分，大致指的是，從豐臣秀吉統一天下(1590年)開始，經過徳川歴代將軍的支配，到明治維新(1868年)為止大約300年的期間。這個時代所具有的特色是豐臣秀吉或是徳川歴代將軍一元性支配、編制全國大名的權力。

如此情況對於北海道(蝦夷島)的權力亦為相同。室町・戰國時代時蠣崎氏，稱霸蝦夷島南部的渡島半島，統領和人領主，另一方臣服於本州北部、秋田大名的安東氏，受其權力保障。繼豐臣秀吉之後，徳川家康統一天下，



春の松前城。松前氏の蝦夷島支配の拠点。現在の城郭は復元された建築（筆者撮影）

春天的松前城。松前氏支配蝦夷島の據點。現在の城廓為復原的建築（筆者攝影）

吉、次いで徳川家康が天下を統一すると、蠣崎氏の当主であった蠣崎慶広は安東氏の麾下を脱し、直接臣従することに成功、大名として独立した。松前藩の成立である。

秀吉・家康は、それまでに蠣崎氏（のちに松前と改姓）が自力で達成していた渡島半島における権力を追認した。蠣崎＝松前氏の領主権力の源泉は、日本船に課した関税と、「トクイ（得意）」と呼ばれるアイヌ民族との交易権の独占である。それが日本の統一権力である豊臣政權・徳川幕府に承認されたことで、蠣崎＝松前氏はユニークな大名として近世日本國家＝幕藩制國家の一翼を担うこととなったのである。

蠣崎氏の當家蠣崎慶廣便脫離安東氏の麾下，成功地直接臣服於徳川家康，以大名之姿獨立，成立了松前藩。

秀吉、家康，對於蠣崎氏（後改姓為松前）至此於渡島半島以自力所達成的權力進行追認。蠣崎＝松前氏の領主權力的泉源，為對日本船隻課取的關稅，以及獨佔被稱為「トクイ（得意）」（譯者註：羅馬字表記為tokui）這項與愛努民族的交易權。因這些權力受到日本的統一權力之豐臣政權、徳川幕府的承認，所以蠣崎＝松前氏以獨特的大名方式，承擔近世日本國家＝幕藩制國家的一部份。



日本近世国家とアイヌ社会

近世日本国家による松前氏権力の編成は、蝦夷島のアイヌ社会にとってどのような意味を持ったか。端的に言ってそれは、日本市場との取引を松前氏が独占したことによる、不等価交易の構造のはじまりであった。とりわけ、17世紀中葉に至り一般化した商場交易制度は、それに拍車をかけた。従来松前城下へアイヌを迎えて行っていた交易（城下交易）を改め、蝦夷地各地の交易ポイント（商場）へ松前氏もしくはその家臣からの特許を得た船を派遣し交易するかたちが、商場交易制度である。特許を得ない船は商場には入れない。特許は原則として1商場に1つである。蝦夷地のアイヌが日本市場に商品を販売し、あるいは日本市場から商品を購入するには、その船としか取引が出来ない、いわば押し売り・押し買いの構造である。

これに不満を持ったアイヌ民族は、1669年に日高地方シブチャリのシャクシャインを盟主に兵をあげ松前藩と交戦したが、敗北。以後、商場交易が蝦夷島全域に及んでいくこととなった。18世紀半ばに入ると、次第に交易に加え、商場に集うアイヌ民族の居住域を面（＝場所）としてとらえ、その範囲において大網を導入しての漁業経営（場所経営）が本格化するようになった。

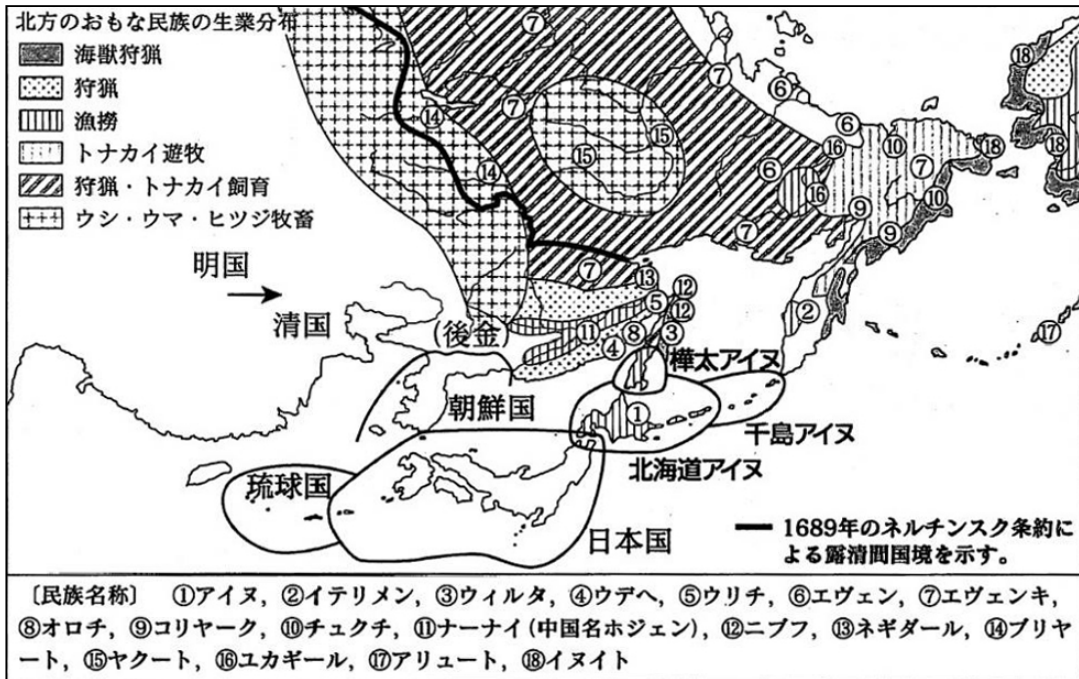
大網を用いるには、労働力が必須である。場所での交易・経営を松前氏もしくはその家臣から特許料と引き替えに請け負った商人（場所請負商人）は、特許料の回収とさらなる収益を

日本近世国家與愛努社會

近世日本國家所進行松前氏之權力編制，對於蝦夷島之愛努社會來說具有什麼意義呢？直截了當地說，那就是松前氏獨佔與日本市場之間之交易，開啟了不等價交易之結構。特別是，到17世紀中葉已經一般化之商場交易制度，更為加速進展。改變從前到松前城下迎接愛努進行之交易方式（城下交易），改派遣取得松前氏或是其家臣特許之船隻，到蝦夷地各地之交易點（商場）進行交易之形式，這就是商場交易制度。未取得特許之船隻便無法進入該地。特許原則為1商場為1個。蝦夷地之愛努將商品販賣到日本市場，或者從日本市場購入商品，也只有該船能進行之間之交易。也就是所謂的強賣、強買之構造。

對此懷有不滿之愛努民族，於1669年由日高地方shibuchari（譯者註：漢字為染退，今日靜內地區）之syakusyain（譯者註：漢字為沙牟奢允，愛努語為saksaynu）擔任盟主舉兵與松前藩交戰，但戰敗終告之後，商場交易便擴展到蝦夷島全境。到了18世紀中葉，逐漸地增加交易，將聚集於商場之愛努民族居住地域當作為面（＝場所），使在此範圍內所導入之大型漁網漁業經營（場所經營）便正式進行。

使用大型漁網必須需要勞動力。承包商人（場所請負商人）從松前氏或其家臣那將場所（譯者註：此處場所為商場）內之交易、經營換成特許費用，承包商人為圖求回收特許費用與更進一步之收益，雇用蝦夷島之愛努民族，用大型漁網捕撈鮭魚或沙丁魚，加工成肥料



近世アイヌ史の舞台 (出典：谷本「『国家』史的観点からみた近世アイヌ社会」)

近世愛努史的舞台 (出典：谷本〈從「國家」史性質觀點所見近世愛努社會〉)

はかるため、蝦夷島のアイヌ民族を雇用し、大網でニシンやイワシを漁獲し、肥料(メ粕)や魚油に加工し、大量に日本市場へ移出するようになった。その際、前貸精算制を導入し、雇用されたアイヌ民族の負債を恒常化させ、事実上隷属させることが横行した。これに抗して惹起したのが、1789年のクナシリ・メナシの戦いである。これは、北海道東部ならびに千島列島南部で起きた武力紛争で、結果的には松前藩により鎮圧された。これにより、場所請負制度が蝦夷地全域に及び、アイヌの苦難の歴史が深まっていくことになる。

(魚渣粕)或魚油後、大量移出到日本市場。於此之際、導入前貸精算制、使得受雇的愛努民族債務恆常化、事實上横行著被迫隸屬的情況。為反抗如此情況所掀起的是、1789年のクナシリ・メナシ(譯者註：日文假名羅馬拼音 kunashiri menashi 漢字表記為国後・目梨)之戰。此為、北海道東部以及千島列島南部所發生的武力紛争、結果受到松前藩鎮壓。由此、場所請負制度遍及蝦夷島全域、加深了愛努苦難的歷史。



さて、クナシリ・メナシの戦いは、江戸の幕府の耳に入り、当時カムチャツカから千島列島方面に南下してきたロシアへの懸念から、その対応策が検討されることになった。結果的に19世紀初頭に、蝦夷島は段階的に幕府の直轄領となり、松前氏は本州の東北地方南部に転封とされた。これを、蝦夷地第一次上知という。

近世アイヌ社会の再編成

蝦夷地第一次上知の時代は、蝦夷地のアイヌ社会に場所請負制度が一般化したのにとどまらず、千島列島やサハリンのアイヌ社会に大きな影響を与えた。千島列島は、18世紀以降ロシアの進出がみられ、列島中部・北部のアイヌ（千島アイヌ）は毛皮税の貢納を果たし、ハリストス正教を受容するなど、ロシアに編成される度合いが強まっていた。列島南部や蝦夷島東部のアイヌは、千島アイヌへ米や酒・漆器などの和製品を出荷し、ラッコ皮やロシア産品を入手、松前＝日本市場との中継交易者として振る舞っていた。しかし、19世紀初頭にロシア



ロシアで出版された千島アイヌの画像（1774年）。

（北海道大学附属図書館所蔵）

俄羅斯所出版千島愛努的畫樣（1774年）。

（北海道大學附屬圖書館典藏）

然後，クナシリ・メナシ之戰一事，傳入江戸幕府的耳中，因為當時幕府擔心俄羅斯從堪察加往千島列島方向南下而來，便開始檢討其因應對策。結果19世紀初，蝦夷島階段性地成為幕府的直轄領地，松前氏則被轉封到本州東北地方南部。此稱為蝦夷地第一次上知（譯者註：上知為沒收或取回大名土地之意）。

近世愛努社會的再編制

蝦夷地第一次上知的時代，不光是蝦夷地的愛努社會中場所請負制度成為一般化，千島列島與庫頁島的愛努社會也受到相當大的影響。千島列島，於18世紀之後能見到俄羅斯進出該地，列島中部、北部的愛努（千島愛努）繳納毛皮稅的納貢，接受ハリストス正教（譯者註：俄語為Христос，即東正教）等情況來說，被編入俄羅斯情況程度強烈。列島南部與蝦夷島東部的愛努，將米或酒、漆器等和製品出貨給千島愛努，取得海獺或俄羅斯產品，以松前＝日本市場的中繼交易者進行活動。然而，19世紀初幕府意圖斷絕對俄羅斯的補給來禁止兩者之間的交



サハリン・アイヌの家に伝わった満洲文の文書（1775年）。
 （北海道大学附属図書館所蔵）

庫頁島愛努家中所傳承的滿文文書（1775年）。
 （北海道大學附屬圖書館典藏）

への補給を絶つ意図から幕府が両者の交易を禁じた。その結果、列島南部は場所請負制度が貫徹し、列島中・北部はロシアの領土として編成されることになる。近代の民族誌の描く千島アイヌの個性は、こうして個性化していくこととなったのである。

一方、サハリン島のアイヌ民族は、18世紀以降清朝の辺民編成を受けつつ、アムールランドのウリチ民族（山丹人）を介し毛皮を出荷する代価として中国産品を入手し、松前＝日本市場と交易した。しかし、蝦夷地第一次上知の時

易。這個結果，使列島南部貫徹場所請負制度，列島中、北部被編成為俄羅斯的領土。近代的民族誌所描寫千島愛努的個性，便是從此開始個性化而形成的。

另一方面，庫頁島の愛努民族，於18世紀之後受到清朝編入成為邊民，同時透過黑龍江地區的烏爾奇民族（山丹人）（譯者註：俄語為Ульчи或Ольчи，又稱烏里奇）為中介出售毛皮並取得中國產品當作代價，並與松前＝日本市場進行交易。然而，蝦夷地第一次上知的時期，以消除對山丹人債務為名目，幕府將愛努



近世日本最大のアイヌ語辞書『蝦夷語集』（1827年）。
カタカナがアイヌ語。（日本国立公文書館所蔵）

近世日本最大規模的愛努語辭書《蝦夷語集》（1827年）。
片假名部分為愛努語。（日本国立公文書館典蔵）

期に、対山丹人債務の解消を名目に、幕府はアイヌ民族を山丹交易から排除し、直営のシステムをつくりあげた。ここでも、アイヌ民族の中継交易者としての地位が日本により否定されたのである。以後、サハリン南部のアイヌ民族は、場所請負制度に包摂されていくことになる。

近世のアイヌ民族

このように、近世のアイヌ民族は、蝦夷島をとりまく日本・ロシア・中国のはざまで、直接的にその政治経済的編成をうけた。とりわけ、日本の場所請負制度は、アイヌ民族に大きな苦難の歴史を強いた。

民族従山丹交易中排除，建構直營的系統。在此也看到，愛努民族身為中繼交易者的地位被日本所否定。之後，庫頁島的愛努民族被含括在場所請負制度之中。

近世的愛努民族

如同上述，近世的愛努民族，在圍繞蝦夷島的日本、俄羅斯、中國的夾縫之間，直接地收到其政治經濟性的編制。特別是，日本的場所請負制度，迫使愛努民族接受相當艱苦的苦難歷史。



近世アイヌの木彫工芸品。厳しい環境のなかで、技術が磨かれた。
(松浦武四郎記念館所蔵)

近世愛努の木彫工藝品。嚴峻的環境之中，磨練出技術。
(松浦武四郎記念館典蔵)

しかし、こうした厳しい環境のなかで、北海道アイヌ・千島アイヌ・樺太アイヌの文化的個性が磨かれた側面がある（千島アイヌの言語・文化は、20世紀中葉に至り残念ながらその伝承者を失ってしまった）。現在アイヌ民族の伝統的な言語・文化の伝承の努力が重ねられているが、その伝統は、近世に成熟した側面があることも、改めて振り返っておく必要があるだろう。◆

然而，在如此嚴峻的環境之中，有一個層面是北海道愛努、千島愛努、庫頁島愛努的文化個性受到琢磨形成（千島愛努的語言、文化很可惜到了20世紀中葉已失去傳承者）。雖然大家目前不斷地致力於現在愛努民族的傳統語言、文化傳承，但另一個層面，他們的傳統已在近世成熟，我們應該有必要重新回顧這部分。◆

作者簡介 | プロフィール

谷本晃久 TANIMOTO Akihisa

北海道大学大学院文学研究科教授、同大学アイヌ・先住民研究センター兼務教員。東京大学史料編纂所ならびに国立歴史民俗博物館共同研究員を務める。

1970年北海道札幌市生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科史学専攻博士後期課程中退。同大学助手、北海道教育大学助教授などを経て、現職。専門は日本近世史。最近は、ロシア所在史料の国際共同研究に従事している。著書に、『近藤重蔵と近藤富蔵』（山川出版社、）、『新旭川市史』通史編2～4（共編著、旭川市）、『北海道史事典』（編集代表、北海道出版企画センター）など。論文に、「近世の蝦夷」（岩波講座『日本歴史』第13巻近世4）、「幕末・維新期の松前蝦夷地とアイヌ社会」（明治維新史学会編『講座明治維新1 世界史のなかの明治維新』（有志舎）、「『国家』史的観点からみた近世アイヌ社会」（宮地正人ほか編『新体系日本史1 国家史』山川出版社）などがある。


谷本晃久 TANIMOTO Akihisa

北海道大學大学院文學研究科教授、同大學愛努・先住民研究中心兼任教員。擔任東京大學史料編纂所與國立歷史民俗博物館共同研究員。

1970年北海道札幌市出生。學習院大學大學院人文科學科史學專攻博士後期課程肄業。經歷同大學助教、北海道教育大學副教授等，直到現職。專業為日本近代史。最近從事俄羅斯當地史料的國際共同研究。著作有《近藤重蔵與近藤富蔵》（山川出版社）、《新旭川市史》通史篇2～4（共編著、旭川市）、《北海道史事典》（編輯代表、北海道出版企画中心）等。論文有〈近世的蝦夷〉（岩波講座《日本歷史》第13卷近世4）、〈幕末・維新期的松前蝦夷地與愛努社會〉（明治維新史學會編《講座明治維新1 世界史之中的明治維新》（有志舎））、〈從「國家」史性質觀點所見近世愛努社會〉（宮地正人等編《新體系日本史1 國家史》山川出版社）等。